

村山 龍君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：〈世界全体〉の再創造

—一九三〇年代、宮澤賢治受容とその背景—

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学教授（文学部）

屋名池 誠



文学研究科委員

副査 慶應義塾大学名誉教授

松村友視



副査 フェリス女学院大学教授（文学部）

島村 輝



論文要旨

本論文は、宮澤賢治の最晩年から1933年の死去後まもない時期にあたる評価・受容のありようと、同時代の文学状況・思想状況とを総合的に捉え返し、コスモポリタン的な意味での思想再編の一方で思想統制に向かおうとする言説空間と賢治文学との位相関係を広範な視野から論じたものである。

本論文は以下のように構成されている。

序論 〈宮澤賢治〉のメカニズム ——崩壊の危機と再創造——

第一部 一九三〇年代の文学的展開 ——科学的認識と文学の綜合——

第一章 エスペラントと日本近代文学の接点

—新たな〈世界全体〉への視座として—

- 一、言語のなかの人びと
- 二、解体／統合する言語
- 三、日本における言語と抑圧
- 四、「緑の野」の戦略・一 ——モデル問題から見るテーマ性—
- 五、「緑の野」の戦略・二 ——エスペラント利用の意味—
- 六、デラシネの日本—近代—文学

第二章 プロレタリア文学運動の射程と限界 ——前田河廣一郎「川」を中心にして—

- 一、プロレタリア文学と〈世界全体〉の関わり
- 二、プロレタリア文学としての「川」
- 三、語り手の意識した「実験心理学」
- 四、〈運動〉の起点にあった個別性
- 五、誰のための〈運動〉か
- 六、環世界のなかの個人
- 七、プロレタリア文学運動の先にあるもの

第三章 大東亜共栄圏というモダニズム
——春山行夫と西田幾多郎のT・S・エリオット受容——
一、モダニズムの「伝統」回帰
二、春山による戦闘的詩論 ——『詩と詩論』の時代——
三、T・S・エリオットへの注目 ——その〈伝統〉観を中心に——
四、エリオットとの融合 ——『新領土』の時代——
五、〈伝統〉と西田幾多郎
六、モダニストたちの大東亜共栄圏

第四章 文藝懇話会をめぐる考察 ——〈禁止〉から〈改善〉への転換点として——
一、文藝懇話会の存在
二、文芸院構想の発案と反応
三、「文藝懇話会参考資料」の存在
四、内務省内部への批判の浸透
五、「統制」の指し示す意味

第二部 〈宮澤賢治〉の受容と同時代の文学 ——文学的〈世界全体〉の発見——
第五章 賢治没後の作品公表の道行き
一、没後から文庫版全集まで
二、『宮澤賢治名作選』と松田甚次郎
三、十字屋書店版全集の刊行

第六章 宮澤賢治初期受容における横光利一の影響
——文藝春秋講演会での発言をめぐって——
一、文藝春秋講演会への注目
二、文藝春秋講演会における横光利一の発言
三、一九三四年前後の横光の思想
四、横光の発言が与えた賢治受容への影響

第七章 〈自画像〉としての〈宮澤賢治〉 ——初期受容における評価の変遷——
一、『春と修羅』の同時代評
二、草野心平による賢治礼賛
三、『宮澤賢治追悼』のもたらしたもの
四、芸術家としての〈宮澤賢治〉
五、近代的知性への反抗者
六、宗教への接続
七、戦前における二つの『宮澤賢治研究』
八、変容する〈宮澤賢治〉

第八章 ローカルなコスモポリタンたち ——〈日本的なもの〉をめぐる問題機制——
一、〈日本的なもの〉と宮澤賢治受容
二、横光利一の「原理」
三、保田與重郎の「ルネツサンス」
四、再創造される〈宮澤賢治〉

第九章 昭和期農民文学運動と宮澤賢治の連関 ——アナキズム的認識に基づく接続——
一、宮澤賢治と農民文学
二、昭和期農民文学運動の出発
三、昭和期農民文学運動のアナキズム的色彩
四、宮澤賢治における農民意識と文学の連関
五、ユートピアの原型

最終章 「おまへはあのプレシオスの鎖を解かなければならぬ」
——宮澤賢治による文学的再創造——
一、賢治テクストの示すもの
二、〈世界全体〉を再創造するために
三、テクストのなかの四次元
四、〈世界全体〉と文学的営為

主要参考文献一覧

論文の概要

メインタイトルの「世界全体」という言葉は宮澤賢治の「農民藝術概論綱要」にある「世界全体が幸福にならぬうちは個人の幸福はあり得ない」という広く知られた文章をふまえるが、同時にそれは、コスモポリタニズムやプロレタリア文学運動、モダニズム芸術などの同時代性、さらには理論物理学などで急激な進展を示す自然科学的な認識など、1930年代の文学状況・社会状況がさまざまな形で担っていた「世界全体性」を視野に入れたものもある。

本論に先立つ「序論」において、2011年の「東日本大震災」後に召喚されることになった宮澤賢治像をめぐる言説編成と、本論文が研究対象とする1930年代から戦中期のそれとを対比的に示すことにより、対象と研究者主体とを繋ぐ契機が具体的に述べられている。

これを踏まえて本論は、「世界全体性」との関わりという観点から1930年代の文学状況・時代状況を広い視野で意味づける第一部と、これを背景に宮澤賢治受容の様相とその意味を具体的に論じる第二部の2部構成で展開される。

第一部はさらに4つの具体的な座標軸を設定している。その第1はエスペラントをめぐる問題、第2はプロレタリア文学運動と科学的認識との関わり、第3はモダニズム詩論と伝統との接合、第4は文学界に対する言論統制をめぐる問題である。

宮澤賢治がエスペラントに深い関心をもっていたことは周知のことだが、帝国主義的な植民地化による言語の抑圧状況を背景に生み出されたエスペラントは、プロレタリア文学運動やモダニズム芸術運動と結びつくコスモポリタニズムとしての「世界全体性」の側面をもつ一方、ナショナリズムとのつながりも見出せるなど、解放と統合という両義的な側面をもっている。村山君はこうした状況を第一章で俯瞰した上で、エスペラントを一部にもちいた秋田雨雀の戯曲「緑の野」(1915年7月)の分析を通して、個人的自由と国家との関係やアナキズムの原理との通底など、テクストに託された批評の多義性とエスペラントとの関わりを論じている。

つづく第二章ではプロレタリア作家・前田河廣一郎の小説「川」(1932年7月)が取り上げられる。社会主義運動と「世界全体性」との関わりの分析を踏まえた上で、実験心理学的知見を基盤に個人と組織との関係が問われていることに着目した村山君は、「運動」における階級意識と労働者個々人の主体性をめぐる従来のプロレタリア文学のアポリアを相対化する試みとしての意味をそこに読み取っている。

第三章では、ヨーロッパ・モダニズムの行動主義の影響によって日本のモダニズム文学に「日本的なもの」への回帰という捩れが生じたことが検証される。村山君は、雑誌『詩と詩論』において春山行夫を中心に行われるモダニズム詩論とイギリスの詩人T・S・エリオットの詩論との密接な関係を分析し、戦時下の言説空間の日本主義への傾きと、主知主義を掲げた春山の認識が矛盾なくつながっていく理路を明らかにする。その一方で、モダニズム文学運動とも結びついた西田幾多郎哲学とエリオットの「伝統回帰」観との関わりを具体的に示し、従来言われるようにモダニズム文学運動は時局によって抑圧されたのではなく、むしろ大東亜共栄圏というナショナリズムと内部的に連動していったことを立証している。

さらに第四章では、言論統制の中核的機関である内務省警保局の発案になる「文藝懇話会」発足をめぐり、検閲官の一人であった佐伯郁郎が作成した内部資料「文藝懇話会参考資料」の解析を通して、日本文化の把握と検閲に基づく「思想善導」という当初の目論見が文学者たちの反対によって「日本的なもの」の奨励という方向に転回し、結果的に文学報国会に代表される戦時下の統制につながっていく経緯を明らかにする。

このような同時代状況の分析を踏まえ、第二部では宮澤賢治受容の様相が具体的に跡づけられる。

村山君はまず第五章において、賢治没後、草野心平による『宮澤賢治追悼』（1934年1月）の刊行を契機に作家・横光利一とのつながりが生じ、さらに横光による賢治の再評価が文庫堂版『宮澤賢治全集』（3巻、1934年10月～35年9月）の出版に至る経緯を具体的に示し、これを機に、松田甚次郎『宮澤賢治名作選』（1939年3月）、十字屋版『宮澤賢治全集』（10巻、1939年6月～1943年12月）等の刊行がつづくなかで宮澤賢治の「聖化」が要請されていく様相を浮き彫りにする。

わけても横光利一の示した賢治理解が賢治評価において果たした役割はきわめて重要であり、第六章では、1934年9月に盛岡で開催された文藝春秋社主催の講演会における横光利一の講演内容に着目し、「純粹小説論」（1935年4月）を始めとする同時期の横光の文芸観との関連に着目しつつ、横光によって提示された、芸術・宗教・科学の融合統一を目指す賢治像、精神生活の実践者としての賢治理解が今日に至る賢治評価の定型となっていることを指摘する。

つづく第七章において村山君は、草野心平らの主催する詩誌『歴程』『銅鑼』同人たちが『宮澤賢治追悼』において示した賢治評価の今日的な意味を始め、高村光太郎・保田與重郎・谷川徹三ら、さまざまな文学者・哲学者による賢治評価を比較検討し、それらがそれぞれの評者の自画像の意味を担いつつも、一方で賢治と〈伝統〉との接続を促し、「近代の超克」を体現した賢治像が成立していく過程を跡づけている。

これを受けた第八章では、横光利一の長篇『旅愁』（1940年6月～1943年2月）および保田與重郎における万葉精神への傾きが、それぞれに異なる方向で賢治と結びつきつつ「日本的なもの」へと接続される回路を明らかにする。

その上で、プロレタリア文学、モダニズム運動を経て、同時代思想が「日本的なもの」をめぐるナショナリスティックな傾向に回収されていく中で、「日本的なもの」を突き詰めることによって「世界全体性」につながるという逆説的な通路が見出されていく過程を示し、こうした問題機制と回路が結ばれることで没後の賢治表象が大東亜共栄圏的な構図に収斂していった過程を明らかにしている。

このような同時代における賢治受容・賢治表象の一方で、晩年の賢治が農民芸術運動などを通じて実際にもとめたものが第九章において改めて問われることになる。

村山君は、シャルル・ルイ・フィリップへの関心などから出発した昭和期農民文学運動がアナキズムと深く関わることを確認した上で、賢治の農民芸術観を示す「農民芸術概論綱要」（1926年）を分析し、芸術と農業との総合をめざす賢治の思想が、室伏高信などにみられる反文明・反近代的な農村回帰の思想とは異なり、科学への信頼を背景に、クロポトキンのフェデラリズムにもつながるアナキズム的傾向をもつことを指摘し、近代文明の先にある「新興芸術」としてそれが位置づけられていたことを

論証している。

さらに村山君は最終章において、賢治テクストの中に示される認識論が現象学的な考え方と通底することを指摘する一方、賢治のテクストが、同時代における〈世界全体〉再編成の背後に失われたものの回復を求める傾向にあることを示し、同時代の認識体系とは異なる地平で賢治が求めたものは、〈世界全体〉を根源的な無分節の世界に向けて文学的に再創造することにあったとする。

審査要旨

本論文は宮澤賢治を中心的対象とするが、賢治の評伝研究や作家論を意図したものでも、作品論の集成として編まれたものでもない。本論文が意図するのは、個別の作家論、作品論の枠組みを離れ、宮澤賢治とその作品が今日みるような評価を受けるに至る初発の過程を追いながら、その現象の背景となる文学的要因を分析し、その場にはたらいた〈力学〉を解明することにある。

この前提に立ち、第一部は、〈宮澤賢治〉という特異点が形成される1930年代から戦中期に至る文学場を、エスペラント運動、プロレタリア文学、モダニズム文学と大東亜共栄圏、文藝懇話会をめぐる思想統制という4つのトピックスを立てて「世界全体性」という視野から論じる構成となっている。これらは実在の宮澤賢治という文学者と直接緊密に結びついているものでは必ずしもないが、〈宮澤賢治〉という文学現象を軸としてこの時代を論じる際に、それぞれが重要な背景要素となっていることは、本論文の論述全体を通して十分に納得することができる。

第一章は、同時代においてエスペラントの担っていた多義的な意味を視野に、エスペランチストとして知られる秋田雨雀の戯曲「緑の野」を主な対象として、国民国家体制からの離脱の術としてのエスペラントの役割を見出している点は斬新な視座であり、かつ十分な説得力をもっている。ただし、〈世界語〉を標榜したエスペラントにとっての〈世界〉が、本来的に西洋近代的〈世界〉の枠の中に留まるものではなかつたか、という問いはその方に立てられるだろう。

第二章は、前田河廣一郎の小説「川」の分析を通して、組織的運動と、そこから疎外されるプロレタリア個人の主体との関わりをめぐる解決しがたい矛盾の所在を明らかにし、プロレタリア文学の抱えるアポリアの一端を鮮明に示し得ている点で評価できる。他方、プロレタリア文学運動全体の流れを視野に、小林多喜二の「蟹工船」(1929年)や徳永直の「太陽のない街」(同)などに描かれた〈虐げられた身体〉の役割の影響等にも目配りを行うならば、一層説得的に論が展開できたかと思われる。

第三章は、詩誌『詩と詩論』に拠った詩人・春山行夫と哲学者・西田幾多郎の論に共通の基盤を与えたT.S.エリオットの存在の大きさについて論じており、とりわけ、エリオットが示した「伝統回帰」観に春山や西田が新たな意味を見出すところに、その後の思想統制と接続する回路を見出し、モダニズム文学の歴史的位置づけに新たな視座を導入することに成功している。

この第三章と、つづく第四章の、内務省警保局の主唱による「文藝懇話会」の発足と変容を巡る資料の分析・考察は、1930年代にあって文学者や周辺知識人たちが、どのような主体的契機によって、あるいは周辺からの働きかけによって、やすやすと〈大東亜共栄圏〉的言説に巻き込まれていってしまうのかについて丁寧な解説がなさ

れており、従来の包括的なイデオロギー批評の偏向を正すという点でも重要な意味を担っている。ただし、思想統制に接続する理路が整合的に跡づけられることで、〈大東亜共栄圏〉的言説に回収されていったという歴史的事実に免罪符を与えかねないことへの慎重な配慮も一方で求められるだろう。

本論文の第二部は、こうした状況を背景として、1933年の宮澤賢治没後における〈宮澤賢治〉像の形成の〈力学〉についての考察に充てられる。

文庫堂版全集を始め、作品の選択、校訂、出版が進むにつれて賢治像が聖化されていく経緯を詳細に跡付ける第五章を受け、第六章ではのちの賢治表象に決定的な役割を果たした横光利一の賢治評価が、第七章では草野心平と詩誌『歴程』『銅鑼』の同人たちによる〈宮澤賢治〉をめぐる言説が、そして第八章では、横光利一と保田與重郎それぞれの「日本的なもの」への接近が賢治評価と接続される回路が分析される。こうした中で、農村を基盤とする精神生活の実践者としての賢治像が要請されていく一方、第三章で論じられたような〈伝統回帰〉を転回点として「近代の超克」を体現した作家像が形成されていくプロセスが丹念に辿られる。

第五章から第八章までの展開には、個々の論を繋ぐべき間隙がなお残されていると思われる箇所も見出されるものの、全体として詳細な資料による裏付けと積極的な思考の跡が見出され、本論文の中心的な主題が精力的かつ説得的に展開されていて、本研究の意義を集約的に窺わせる部分といってよい。

第九章は昭和期農民文学運動と宮澤賢治の連関について、アナキズムを参照枠として論じたものであり、賢治の「農民芸術概論綱要」の分析を通して賢治の農民芸術觀と、クロポトキンのフェデラリズムにもつながるアナキズムとの関係を浮き彫りにしていく論述自体には十分な説得性を認められるが、前半と後半の連結にやや論理的飛躍がある印象があり、農民文学運動とアナキズムの接点の問題を第一部に組み入れ、アナキズムと賢治との関係については第二部で別個に論じるという方法もあったかと思われる。

最終章は、これまでの論述を踏まえて最晩年の賢治自身のテクストにたち帰り、〈世界全体〉の脱創造と再創造とを射程に入れた賢治の文学世界が、同時代における〈世界全体性〉の再編成の方向とのあいだに本質的な位相差を抱えていたことを明らかにし、そこに賢治文学の至り着いた思想の独自性を見出すと共に、常に新たな解釈の積み重ねを要求するものとして位置づけられている。

以上のように、一見するとそれぞれ別個の動きであったように見える1930年代の〈文学場〉にはたらく〈力学〉が、〈宮澤賢治〉という特異な現象をめぐって作動するときに現れてくる独自の様相を総合的に捉え返し、個別作家論、作品論という枠を超えた広範な視野の中で賢治文学の位置づけの新たな方向性を示唆しようとする大きなスケールの構想のもとに書かれているのが、本論文の特色である。

本論文の方法意識は、文学的言説の成立する場の〈力学〉を、文学を取り巻くさまざまな言語現象のありさまを精査することを通じて明らかにしようとする近年の研究上の先端的な動向をよく踏まえたものであり、従来の研究の多くが立脚してきた、膨大な資料体の集成を通して自ずから論点が立てられてくるという面にとどまらず、〈宮澤賢治〉という特異な文学現象を焦点として前景化することにより、立体的な〈文学場〉の様相を提示することに成功している。

また〈宮澤賢治〉を焦点とすることによって、これまでイデオロギー先行の枠組みを抜け出すことが難しかった1930年代から戦中の文学者・思想家たちの思考のありように新たな視座から迫ることを可能にしたという点も、本論文の特長として挙げることができる。

1931年の「アジア太平洋十五年戦争」突入後、1933年の小林多喜二、宮澤賢治の死、その後のプロレタリア文学運動の崩壊と、当時文芸ジャーナリズムで呼ばれた「文藝復興」の背景のなかで、この時代全体の文学的・思想的状況の変動について表面上の差異を超えた大きな動きとしてとらえる研究は、これまでアクチュアリティのある成果を十分に生み出してきたとはいえない状況にあったが、本論文は、先端的な研究動向と基盤を共有する問題意識に立つひとつの鮮明な成果としても高く評価できる。

以上述べてきたように、本論文は、個々の論点において示したような問題点は指摘されるものの、問題意識の所在、研究動向上の位置、執筆の主体的動機などの面で先鋭的な学問的水準をもつものと考えられる。

以上の諸点から、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与にふさわしいものであると判断するものである。